「今日の説教、聴き手のために」　2013/5/12　明治学院教会（311）

（このプリントは毎週作っているものです）　牧師　岩井健作

「実を結ぶ奉仕」　ヨハネによる福音書１３章１節－７節

選句「それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い・・『あとで、分かるようになる』と言われた。」（13:5-7）

１、「儲かりまっか」。大阪で庶民が交わす挨拶です。「儲け」に関係しているのに割にさわやかなのは、そこに自分本位、やりたい放題、の思いが表に出ていないからでしょうか。ところが、「儲け主義」は経済至上主義といって、資本力で辺りを蹴散らし、貧しい者を切り捨てる横暴がまかり通ります。まだ放射能や廃棄物問題が未解決だというのに「原子力産業」を外国に売りまくる「この国の首相」のニュースに悲しみと憤りを感じている人は多いと思います（「東京新聞」5/11社説が批判）。「儲け」の対極は「奉仕」「ボランティア」です。教会はまさに奉仕の共同体です。しかし、奉仕も勝手本意となるとどこかおかしくなります。今度の震災で「キリスト教のボランティアお断り」と言われた地域があったと聞きました。「衣の下の鎧」でキリスト教の宣伝がちらついていたのでしょうか。隠れた自己本位、自己充足、身勝手への戒めです。

２、「イエスの洗足」の話は、表では「師が（奴隷の立場で）弟子に仕える」奉仕の話。内面では「イエスの十字架の死」の意味を暗示する話です。弱く、罪深い（自己中心な）自分も、（神の）愛で贖って戴き、たとえ他人を侵し、傷つける者もなお、裁きにまさる赦しをもって包んでくださるという暗示です。他の福音書では「主の晩餐（パンとぶどう酒）」が「イエスの贖罪（神の小羊）」(1:29)を示している位置にあります。奴隷の仕事を「たらいに水を汲む」まで自分でやっている件は感激ものです。ヨハネの教会はユダヤ人の迫害に晒されて教会でした。本当、内々のいたわりが必要でした。

３、もし「ほんとうの、ほんとうの奉仕」があるとすれば、それは、イエスの生涯と業が示している「福音の出来事」に驚異するばかりです。しかし、ここでイエスの奉仕に近付く慰め深い、二つのルートが恵みとして示されています。①「今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」（13:7）。②「あなたがたもするようにと、模範を示したのである」（13:15)。ヨハネの教会には「自分に死なない」奉仕があったのかもしれません。いや、イエスの当時の弟子集団も同じだったのでしょう。分かちゃーいなかったのです。そういえば、我々だって同じことです。「あとで分かる」は歴史の世界を生きることです。そこで生を刻むことが許されていると言うことです。失敗があってもいい、罪責を告白しつつ、前に向かって進むのです。「模範」は「まねる」という教育の世界を生きることです。教えることはできなくても学ぶ（まねる）ことはできる、と言われます。「背中が語る」生き方が世代をつなぎます。今日は「母の日」です。地上でイエスの「愛」をよく写しだしているのは、子を思う母の愛でしょう。「後で分かる経験」として大切にし、「まねて」生きてゆきたいと思います。

４、神戸での経験ですが、毎年「一灯園」の方たちがグループで、「日の寄進」ですといって教会の掃除をさせてほしいとこられました。トイレなど綺麗に掃除をしてくださいました。隠れた形でイエスさまが来られているのだなーと頭が下がりました。